

今回扱うアニメ作品：エヴァンゲリオン 新劇場版 Q

その2

今回のテーマ

良い対象を見出し、交流し、現実に向き合うこと

前回のおさらい

新劇場版 破 ではシンジと綾波が一体となる幻想的なシーンで終わった。しかしシンジの起こした行動は、それはシンジが綾波の喪失を受け入れられず、躁的な心性によって起こしたものだと考えられる。一般的に躁的な心性では、悪い対象と良い対象が分割されたままの世界（つまり妄想分裂ポジションの世界にとどまったまま）であり、その世界は幻想であり、維持できるものではない。

排出された悲哀は必ずふたたび心に回帰して抑うつの苦しみとして体験される。それによって起きたニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しむことになる（バイトテロを思い出す）。またシンジ自身の心も、これまで排出してきた相次ぐ喪失（これは思春期の喪失の感情でもある）という心の痛み、悲哀が再び回帰し、現実に向き直し、苦悩し、もがきいている。

一般的に現実に起きた苦悩や悲哀を受け入れていくには、自身の持つ愛の中にいかに収めていくかということが大切である。そのなかで起きる徐々に「こころの痛み」を受け入れていく。

それにはシンジを取り巻く人々がシンジの思い（苦悩）を受け止めていく対象であり環境が必要不可欠である。

しかし暴走してしまったシンジはニアサードインパクトを起こし、周囲を非常に苦しめてしまった。それゆえシンジに対して彼を取り巻く人々は怯えと憎しみ、怒りの感情を抱いている。Qの冒頭部ではシンジが目を覚ましたちき、ヴィレの人々は負の感情に満ちて誰もシンジに関わろうとせず、殺伐とした重苦しい雰囲気の様子が描かれている。

そしてリツコもシンジの首に取り付けたDSSチョーカーに関して

それ故、誰もシンジの苦悩を受け止めて貰えずシンジの心の成熟が阻害されてしまっている様に感じられる。

「私たちへの保険。覚醒回避のための物理的安全装置。私たちの不信と、あなたへの罰の象徴です」と話している様に強い疑念と不信感をシンジに表明しており、ヴィレ内ではシンジの心をきちんと受け止める環境とは到底言い難い。

シンジが覚醒後、アスカとの初めての対面

そしてシンジはアスカとの再会だが、アスカは怒りに満ちており、シンジに対して殴り掛かろうとする。

アスカ自身もヴィレの人々と同じ感情を抱いていたことに加えて、シンジ・綾波・アスカの3者

で考えた時にシンジと綾波が強い一体感を作り出したことに対して自分が排除された形になったと考え、シンジ・綾波に対して強い嫉妬心を抱きシンジにぶつかってきたとも考えられる。

しかしそのことにはシンジは全く理解できず、彼としてはヴィレの人々皆を迫害対象と捉え、どんどん彼は心を閉ざしてしまう。そして序の冒頭部の心性に退行しているようにも感じられる。

シンジは良い対象を求めて、綾波の声に従い、綾波が操縦する0号機にシンジが乗り込む。飛び立った後にアスカが言った言葉が非常に印象的である。

アスカ「ふん、あれじゃあ、バカじゃなく……ガキね」

これはシンジがシンジ・綾波の二者関係への退行してしまったことに対する発言と共に3者から関係からアスカが弾き出されたことへの妬みでもあるように感じられる。

3. NERVに戻ったシンジはどうなったのか？

1) NERVでのシンジの生活はどんなことを象徴しているのか？

綾波の誘いからNERV本部に戻ったシンジだが、「ジオフロントなのに、空が見える……」状態でボロボロで朽ちたNERVの状態に「ホントに14年も経ってるんだ……」と感慨深くなる。(こ

の世界そのものが彼の心性の象徴 cf：序の綾波の部屋)

そしてしばらく何もない、だだっ広い、シンジ側からはかけられない電話が置いてある殺風景な部屋で、シンジは味気ないペースト状の食べ物（離乳食を彷彿とさせる：口唇期→肛門期か？）を日々の食事をしている。

→以前の序の冒頭部の頃のように、受け身的で感情のないシンジに戻ってしまったこと象徴しているように感じられる。

しかし

シンジ「やっぱり、お礼言っておかなきゃ」

→この状況を変えた思いもシンジ自身には残っている。

綾波との関わりでシンジはどのように感じたのか？

シンジ「綾波？やっと見つけた！」

シンジは綾波の部屋に入るが、殺風景で屋根もなく部屋の程をなしていない。

シンジ「綾波！ずいぶん探したよ……」

シンジ「おっ、ああっ！ちょ……服、なっ、なんか服着てよ！」

綾波「命令、ならそうする」

シンジ「は、入るよ……」

シンジ「あの……綾波、これ、ありがとう。……ずっとお礼言いたかったんだ」

シンジは、音楽プレイヤーを綾波に見せた。しかし、綾波は無表情のまま。

シンジ「プラグスーツ、新しくなったんだ。似合うけど、黒だとちょっと……」

綾波「……」

シンジ「なんだか、ずいぶん変わっちゃったんだね。ネルフ本部……」

シンジ「なんでミサトさんは使徒じゃなくてネルフと戦ってるんだ……」

シンジ「父さんはここで何する気なんだ」

シンジ「みんなどうしちゃったんだろう……ねえ綾波は何か知らないの？」とシ綾波「……知らない」

シンジ「そっか……うん。そうかもな。……ねえ、綾波はいつ初号機から戻ったの？」

綾波は無言のまま答えない。

シンジ「ここは部屋にもなってないよ……。綾波らしいと言えばそうだけど、学校とかなさそうだし、いつもどうしてるの？」

綾波「命令を、待ってる」

シンジ「……ここ、本もないんだ。本とか読んでないの？」

綾波「本……『綾波レイ』なら、そうするの？」

シンジ「うん……よく読んでたじゃないか。部屋にもあったし」

綾波「そう……」

シンジ「そうだ、本、ここの図書室で探して持ってくるよ！あの、英語の本がいいかな。いつも持
ってて、好きみたいだし」

綾波「好き？」

シンジ「うん……だと思うけど……」

綾波「好きって、何……？」

【考察】

このシーンと序でシンジが初めて綾波の部屋に行って、綾波に遭遇し、その後二人の交流が深ま
っていくシーンと対比してみると興味深い。序と同じようにシンジは、当初、積極的に綾波に声を
かけていき、シンジ自身が周囲に対して抱いている思いをぶつける。しかし以前のように綾波はシ
ンジの思いを受け止め、返答する感じはない。ここでの綾波はシンジの心を受け止める（コンテ
ィンする）器になっておらず、綾波が全く空っぽの様な存在になっている。

そこがシンジが言った「ここは部屋にもなってないよ……。」という言葉が象徴的である。

前回このアフレコの後に話し合ったときにふと、サイモン&ガーファnkルの「I Am A Rock」
という歌を思い出したが、その歌詞には次の様なものがある。

I have my books

And my poetry to protect me

I am shielded in my armor

Hiding in my room

Safe within my womb

I touch no one, and no one touches me

僕には色々な本がある

僕を守ってくれる詩もある

鎧に身を包むのさ

自分の部屋に隠れて

自分のなかで安全に過ごす

誰とも触れようとは思わないし

誰も僕に触れようもしない

上記の歌詞の様にシンジは自分の綾波に対して、心の痛みから自分の心を守ってくれる存在（良い対象）だと考え、綾波を探していたが、ここでのシンジの言葉、「ここは部屋にもなってないよ……。」は、今の綾波は自分を受けめてくれる存在になっていないよ、ということを表明している言葉の様に感じられる。

つまりこの二人の会話を経て、シンジは自分を守ってくれる対象はいないと強い喪失を感じたのではないだろうか？

その後…自室に戻ったシンジは音楽プレイヤーをいじるが、

「ダメだ。動かないや……」

音楽プレイヤー色々動かそうとしても、壊れて動かなくなっている。

→音楽プレイヤーに関してシンジは破で「耳を塞ぐと心も塞がるんだ。嫌な世界と触れ合わなくてすむからね」と言っている。

そしてシンジは横になると今まで言われたこと何度も思い出される。

「何もしないで」とミサトが言う。

「あんたには関係ない」とアスカが見下ろす。

「エヴァにだけは乗らんでくださいよ」とサクラが叫ぶ。

「エヴァに乗れ」とゲンドウが言う。

「知らない」とレイが言う。

支えのなくなったシンジは周囲の言葉を全て被害的に捉え、その言葉に混乱し、苦悩しているように感じられる。

4. 渚カヲルとの関わりはシンジにどのような影響を与えたのか？

この Q では、今まで親しい存在だと感じていた葛城ミサトやアスカが、迫害対象になり、綾波も移行対象にならなくなっていると感じているシンジは、支えを失い、孤独を感じていたと感ぜられる。そのなか、渚が彼をピアノの連弾に誘い出す。

1) 渚カヲルはどんな人物なのか？

「君（シンジ）と同じ運命を仕組まれた子ども」と自己紹介する。

常に柔和な笑みをたたえ、感情を出すことはほとんどなく、ミステリアスで達観している感じさをする。その点が綾波レイと似ているようにも感ぜられる。

そのカヲルがシンジにピアノの連弾を誘う。全くピアノを弾いたこともないシンジは戸惑うが、それにカヲルはコメントする。

カヲル「ピアノの連弾も音階の会話さ。やってみなよ」

シンジ「いいよ。僕には無理だよ」

カヲル「生きていくためには、新しいことを始める変化も大切だ」

その後カヲルが弾くピアノにぎこちない感じが入っていたシンジだが、徐々に水を得た魚のように
イキイキとして二人の演奏が一つになっていく。

シンジ「音が楽しい。二人ってすごいね」

カヲル「簡単さ。君はこっちで鍵盤を叩くだけでいいんだ」

カヲル「さ、弾いてみなよ」

カヲル「いいね、いいよ、君との音」

カヲル「音が楽しい。二人ってすごいね」

シンジ「ありがとう。なんだか久しぶりに楽しかったよ」とシンジは言った。

カヲル「僕もさ。またやろう。いつでも来てよ。碇シンジ君」

シンジ「うん。あの、君は……」

カヲル「僕はカヲル。渚カヲル。きみと同じ、運命を仕組まれた子供さ」

この会話のやり取りから、カヲルは殻に閉じこもろうとするシンジに殻を破り、外界で人と深く情緒的に関わること（それがアンサンブルだと考える）が非常にイキイキとした彩りを持つものなのだということを水先案内人のようにさし示しているように感じられる。

→設定ではシンジの理想化された対象とも言われており、シンジ自身が抱いてきた内的な（理想的な）父の象徴のようになっている。

2) 渚カヲルと関わることで、シンジの心はどのように変わっていったのか？

シンジはカヲルと関わることで彼とピアノの連弾を通じて、深く情緒的に関わっていく。

綾波の部屋に向かったが、綾波がおらず、シンジが置いていった本も手付かずのままで、シンジはそこに新しい本を重ねておいた後のシンジとカヲルの2回目の連弾のシーン

カヲル「おはよう。碇シンジ君。今日ははやいね」

シンジ「他にすることがないから……」

そして、二人はピアノの前に腰を下ろして連弾を始める。

カヲルの奏でる旋律に、シンジがしっかりと付いて行く。

シンジ「どうしたらもっとうまく弾けるのかな」

カヲル「うまく弾く必要はないよ。ただ気持ちのいい音を出せばいい」

シンジ「じゃあ、もっといい音を出したいんだけど、どうすればいい？」

カヲル「反復練習さ。同じことを何度も繰り返す。自分がいいなって感じられるまでね。それしかない」

【考察】

シンジが「うまく弾く」コツを尋ねたときにカヲルは「気持ちのいい音をだせばいい」と言っている。そこでは、なにか周囲に対してうまく振る舞う必要はないと言っており、そのことに加えて、自分が心地の良いと感じられることに目を向けていくことの大切さを伝えている。

これは序においてシンジ自身は傷つかないように自己愛的殻を作って、非常に物分かりの良い子人のように接してきたと考えられるが、Q ではまた序における初めのシンジに戻りつつあるように感じられる。その中でカヲルは人と交流することの中で大切なことは、そのように外面を磨いていくことは必要ないこと、自分が心地よいと感じることを追求していけばいいと伝えているように感じられる。

しかしそれは自身の欲望に身を委ねることではない。シンジは「もっといい音を出したいんだけど、どうすればいい？」と尋ねている。それは社会の中で自身が心地よくイキイキと感じながら他者と関わっていくことはどうすればいいとカヲルに質問している。それに対してカヲルは「反復練習」の重要性を説いている。楽器の演奏でもスポーツでも反復練習と非常に重要（cf. 1万時間の法

則) だが、自分のこれだと思えるものをとことん追求していく、ひいてはそのことが自身に磨きがかかることにも繋がっていると言っているように感じられる。

この会話のやり取りが連弾の中で交わされていることが大切。連弾で関わること喜びを一緒に考えながら、より深い喜びを得られるには何が大切か？ということ伝えてる。

3) シンジが現実を知ること。

～妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行することの辛さ～

カヲルと関わる中でシンジは現実世界を知ろうという思いが強くなり、鈴原トウジ書かれたタグのついたシャツを着て、シンジは自身が長い間現実から隔絶されていたことを痛感し、怖くなり、現実に向き合おうとする覚悟を決めたと考えられる。

シンジ「うわっ！」

断崖絶壁の階段は、一步踏み間違えれば命の保証はないほどの高さにある。下から吹き上げる強風と濃い霧が、足下の悪さに追い打ちを掛ける。シンジは壁伝いの鎖にしがみついて下りようとするが、思うように前へ進めない。辺りは有害な空気が充満しているため、シンジは防護服に体を包んでいる。いつもよりかさばる恰好が、更に歩き辛さを増している。一方、カヲルはいつも通りの制服姿のまま、まるで恐怖感のない様子で階段を降りて行った。カヲルの姿は、みるみるうちにシ

ンジとの距離は開いていき、霧でかすれて薄く、小さくなっていった。

シンジ「渚君！渚君！！」

カヲル「さあ、もう少しだ」

カヲル「もうすぐ雲が切れる。君の見たい真実が見えるよ」

間もなく、厚い雲に覆われた空がゆっくりと幕を開けた。

シンジ「……なんだこれ……」

想像を絶する光景。赤く染まった大地。そこから伸びた巨大な十字架。その十字架は雲を突き抜けるほど高い。雲の絨毯の遥か彼方には、血で染まった星が浮かんでいる。その星は視界の半分を覆うほどに近い。

カヲル「君が初号機と同化している間に起こったサードインパクトの結果だよ」

シンジ「これじゃあ、街のみんなは」

カヲル「この星での大量絶滅は珍しいことじゃない。むしろ進化を促す面もある。生命とは本来、世界に合わせて自らを変えていく存在だからね。しかし、リリンは自らではなく、世界の方を変えていく。だから、自らを人工的に進化させるための儀式を起こした。古の生命体を贅とし、生命の実を与えた新たな生命体を作り出すためにね。全てが太古よりプログラムされていた絶滅行動だ。

ネルフでは人類補完計画と呼んでいたよ」

シンジ「ネルフが、これを……父さんは何をやっているんだ」

カヲル「碇シンジ君。一度覚醒し、ガフの扉を開いたエヴァ初号機は、サードインパクトのトリガーとなってしまった。リリンの言うニアサードインパクト。全てのきっかけは君なんだよ」

シンジ「……違う……僕はただ、綾波を助けたかっただけだ……」

カヲル「そうだね。しかしそれが原因で……」

シンジ「そんな……僕は知らないよ！そんなこと急に言われたってどうしようもないよ！！」

カヲル「そう。どうしようもない君の過去。君が知りたかった真実だ。結果として、リリンは君に罪の代償を与えた。それが、その首のものじゃないのかい？」

シンジ「罪だなんて……何もしてないよ！僕は関係ないよ！！」

シンジは頭を抱えて苦悩する

カヲル「君になくても他人からはあるのさ。ただ、償えない罪はない。希望は残っているよ。どんな時にもね」

【考察】

カヲルとの交流の中で自己愛的な殻を破り、現実に向き合おうとし、カヲルに懇願し、街の様子を見に行ったが、そこに広がる想像を絶する光景。赤く染まった大地。そこから伸びた巨大な十字架。そして破壊され尽くした光景にシンジは言葉を失ってしまう。そして自己愛的殻に閉じこもり、妄想分裂ポジションの心性のシンジは自分の問題とは捉えず、父がこの様にしたと考える。

そこにカヲルは静かにシンジ自身がこのニアサードインパクトを引き起こしたことを伝え、シンジは非常に混乱する。シンジにとってこの惨状は取り返しのつかぬ程に破壊されつくされており、自身がこんなことをしてしまったという現実を受け入れることは耐え難いものであると考えられる。それであるが故にシンジはカヲルの伝える真実を必死に「僕は関係ないよ！！」と言い否認し

続ける。

現実を受け入れるということは、これまで外部に投影していた攻撃性や破壊性が自分自身が行なってしまったのだと気づき、自分に責任があるのだと認め、受け入れる心の作業であり、まさにそれが抑うつポジションの心性である。しかしあまりの惨状にシンジは自分がしたことを受け止めきれず、抑うつポジションに移行しようとしていた心性が再び妄想分裂ポジションの心性に移行し、全てを否認し、自己愛的殻に再び閉じこもろうとしている。

ここでカヲルが最後にいう「償えない罪はない。希望は残っているよ。」という言葉は非常に重く響く。そしてこの言葉はカヲルが「破」の最後に言った「今度こそ君だけは、幸せにしてみせるよ」と言う言葉に呼応している様にも感じられる。

幸せを日々のありふれた生活をイキイキと彩りを感じさせることととらえるならば、シンジを幸せにさせるということはシンジが形成している自己愛的殻を破らせ、妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行させることであると考えられる。シンジにそう仕向けていこうとカヲルは考えていたのではないだろうか？

→その後冬月からシンジの母ユイ、そして綾波の真実を伝えられ、シンジはどん底まで突き落とされ、シンジの脳裏にはこれまで直接父やミサトそして周囲の人々に言われてきた迫害的な言葉がリフレインし、苦しみがく。

「何してたんだ僕は……」

部屋の中で音楽を聴いていたシンジは、自分の無力さに耐えきれず音楽プレイヤーを放り投げ、

「うわあああ！！」と大声をあげてしまう。

あまりの迫害感にシンジは取り乱してしまうが、自分ではどうしようもできず、自分をまもってく

れる音楽プレイヤーも自分の心を守るには機能せず、苦しみながら孤独に必死に耐えていた。